

2023年5月29日

武蔵野美術大学 学長 殿

2022年度 国内研究報告書

| | | | |
|----|-------|----|----------|
| 氏名 | 西田 俊英 | 所属 | 日本画学科研究室 |
| | | 職位 | 教授 |

| | |
|----------------------------|--|
| 研究課題 | 視覚できないもの、或いは視覚だけでなく気配を含めた五感を呼び覚ますような表現方法の研究 自然と人間との関わりの問題等、メッセージ性のある作品制作 大画面で出来る創作の可能性を研究 |
| 研究先 | 鹿児島県熊毛郡屋久島町 |
| 研究期間 | 2022年4月1日～2023年3月31日（一年間） |
| 研究目的 | 屋久島に移住しアトリエを構え、年間を通して屋久島取材し、作品を制作する |
| 研究成果発表予定 展覧会 印刷物 | 2023年10月23日～11月19日 武蔵野美術大学美術館の退任展 （アトリウム2、展示室3、4のうち展示室3にて発表） 退任展の図録 |
| 大学授業における研究成果の還元 | 現地で描いたスケッチや本画を学生たちに見せることで、克明に見て描くことの重要性、五感で感じる世界を描くことの面白味を学生たちに学んで貰う また、美術館で実際に描いているところを見せて、創作の仕方を学んで貰う |

研究概要及び成果

○日本画の特質を生かしながら、変幻自在の日本画に挑戦する

日本の湿潤な気候の風土を描く上で、日本画は最も日本風土に適した表現法だと思っている。

墨はもとより、日本画の絵の具は、膠で溶いた後に顔料が水と親しみ、「水に遊び 水に遊ばれ」水と絵の具が生き物のように、あるいは水蒸気の霧の気配のように、紙面上を流れ動かされ、やがて自然のあるがままのように、行くべきところ、在るべきところに静かに画面に定着していく。

それは、山の背を朝霧が濃淡をつけながら、ゆっくりと竜の如く立ち昇る日本風土の空気の気配を如実に表現する技法として、日本画は最も適切な技法であり、なくてはならない存在だと思っている。

現代の日本画は、ややもすれば西洋画的な表現や写真的なものへと傾いていると思われる。

だからこそ、一年中雨が降り続ける屋久島で、私なりに日本画の優れた特異性とこの美しい水の国の風土とが響き合えるような絵画を描いてみたいと思った。

日本画の極意などと大袈裟には言えないけれど、屋久島の一滴の雫から生まれた水で、どこまで私の理想の絵画が生まれ出ずるのか？

私の力など当てにせず、水に聞いてくれと流れ着く先も、水の流れに任せたいと思って描いている。

そして視覚からのみの写実ではなく、その気配の全ての感覚を画面の中に象徴的に、写実をも超えた五感を呼び覚ます世界のように描ければ良いと願いつつ、一年間の屋久島研究の重要な課題とする。

そして目には見えない、論理的には実在しないものをどう描くのか？これも今回の大きなテーマの要素である。

まずは、目に見える自然を徹底的に観察し、風や水、雲や雨、樹木や岩石などの自然界の現象、自然の創造物のすべてを見つめる。

自然の中で長時間滞在し、自身が共鳴した途方もない素材を自由に組み合わせることにより、思いがけない世界が生まれる。このように自然から得た偶然的な要素を併存させて、自然界の現象も個々が生命を持っているかのように動く画を描きたいと思う。

それは一方、自然が絶えず変化を繰り返す「ゆらぎ」のようなものを表現していくことであり、私の絵もどんどん変形を重ねてゆき、自身も先が読めないという作品になっていく。

そして構図や色という基本的な造形だけでなく、何を描いて行くかというストーリーさえ変化して行く。

このような制作体験は、過去にあまり経験していない、だから大変面白い。

現場でのその日の感動が、明日の画に影響していく。

下図通りに完成させていく手法をとらず、本画に直接ぶっつけで思いのままに描いていく。

写生、下図、本画という日本画の基本的な道筋を少し離れて制作を進めていく。

○屋久島からインスピレーションを得た日本画を描き、メッセージとする

今回のテーマは70メートルに及び屋久島の連結大作「不死鳥」は人間と自然の森との共生であり、尽きることのない生命の循環の話である。

親杉の倒木や切り株を栄養分として、新しく生まれたスギの種が その上に芽を吹き、スクスクと成長し命のバトンタッチをはたしている。

暗い森では 日光を好むスギの若木は生き残ることができないので、こうして親の世代が遺した体を借りて、若杉の種は命を繋いでいくのだ。

そこには何千年という時の流れが 始まりも終わりもない輪廻の輪のような時間軸のなかで、一瞬一瞬の時を刻み続けていく、生命の終わりなき連鎖の宇宙がここにある。

故郷が伊勢神宮の傍であったので、子供の頃から神域の神聖な原生林の森には何か神様の住んでいる領域として馴染んできた記憶がある。

今回、森の中の巨樹を描くことに通じて、そこには巨樹を支えている森の仲間達がいいて、その森の目に見えぬ微生物も、無数にいる虫たちも、動物も植物も、そして欠かせない陽の光も雨も、霧も風も、全て繋がっていながら、人間もまたその一部分の生き物だと云うことを、素直に感じ取ることができた。

これほど自然に感謝しながら、自然と一体化して取材できたことはなかった。

30年前に屋久島が、世界自然遺産になった時、世間からは豊かな自然が残されているかけがえのない島との評価で世界遺産になったと思われている。

勿論それは疑いなくそうなのであり、海拔ゼロメートルから山頂までの垂直分布の原生林の植生の貴重さから遺産へとつながったのであるが…。

実際のところは、屋久島の原生林はすでに島全体の五分之一のみしか残されておらず、ここで伐採や開発の手を止めないと大変なことになってしまう瀕死の状態から救う方法としての自然遺産への登録でもあったことはあまり知られていない。そして屋久島が有名になると同時に、屋久島のシンボルツリーの縄文杉の根は観光客に踏みつけられ、島一周道路の工事によって照葉樹林は断絶されるという危機になり、自然を守る人々によって、縄文杉の根を守るための柵が作られ、道路の拡張工事は阻止されることになった。

森を想う。

縄文の時代、森と共にあったであろう暮らしに我々はもはや戻れない。

しかし森の中にいる時のあの感覚は何なのだろうか。

街でも家でも働かない感覚が呼び戻しのように伝わってくる。

帰って来なさいと、声をかけられているようだ。

森に想う。

森と人が互いに豊かに付き合って行ける術はないのだろうか？

私の中に宗教心と言うようなものが秘められていたとは、自信を持っては言えない。仏心など全く乏しい人間である。

そして、これまで自然の保護を訴え、考えてきた人間でもない。

しかし、美しい自然を人一倍愛し、沢山の絵を描き、取材のために自然の中を歩き回ってモチーフを探してきた。

しかし、屋久島において原生の森に入り、森を描くというかけがえのない体験は、私にとって修行僧が、行を積み重ねてゆくようなものであった。

無になり、森と同化して描く。自身にとって、妥協を捨て、雑念を払い、一心に描くと言うことが、残りの人生の今を生きるということであると思いながら、一筆一筆祈りと共に描いていた。

こうした取材を繰り返していると、この混迷の時代において何が大事なことなのか改めて考えさせられた。いかなる状況であろうとも、人間も自然も、森も生き続けな

ければならないということ、何が起ころうとも生き続ける大切さを知らされた。そしてこの美しい森を次代へと残して欲しいとも思った。森に再び過酷な悲劇が起こらないように、何が正しいのか 何が悪かよく考えなければいけない。確かに屋久島の森に緑は戻りつつある。世界的な自然保護活動の波で、進んで自然を破壊しようとは誰も思わないはずだ。

日本は世界の先進国の中でも国土に対する森林率がフィンランドやスウェーデンに次いで多い。古来、森の恵を受けて生きてきた民族なのだ。しかし今や、その約4割が人工林となっている。

江戸時代、神が宿っていると巨樹の伐採を怖れた島人たちを、その貧しさを救い、治者の利益とするため、言葉巧みに、神はお許しになると言い伐採を進めた。そして近代に入り、また国益のために、復興のためにと伐採を許し、今度はチェーンソーで大皆伐をした。一千年を優に超える巨木が次々あつという間に倒されたという。

現在は千年を超える屋久杉の伐採はせず、保護をし、千年以下の杉や植林をした木を伐採しているという。しかし、千年以下と言えど大木を切っていたら、これから千年、二千年と育つ杉は少なくなってしまうのは明白。そして照葉樹林は切られ、人間にとって有用な木のみを植林していくが、植林した斜面は災害が起こりやすい。人間にとって有用な木は、動物たちの食物になりにくい木であり、山で暮らしにくくなった動物たちは人里へと下り、農作物を荒らし、果樹園などは対抗策で電気柵を設置している。しかし、産業の少ない屋久島では観光業や林業は島の経済の屋台骨であり、人が入らなくなった山は荒れてしまう。

静かに見れば、物みな自得す ～松尾芭蕉の言葉～

島人の生活も、屋久杉も山も森も、動物たちも守るために何をすべきか？

より良い共生のために、そして将来人間が再び過ちを犯さないよう、悲劇がまた繰り返されないようにと、私には描くことしかできない一人の絵描きだが、心を込めて描いていく。

最後にこのようなことは屋久島へ一年間滞在し、取材していないとわからぬことばかりでした。屋久島の自然に深く触れ、森と対峙できたらこそ描ける作品を描かねばと思います。屋久島というスピチュアルな場所に縁があって呼ばれた自身の運命だと思います。

人生の後半にこのような使命を受ける機会を与えていただきました大学の国内研究の制度、また日本画研究室の教員・スタッフの皆様をはじめ、全教員の先生方の御理解、御協力をいただき、深く感謝申し上げます。

付記

I

今回、縁あって、屋久島にてNHK BSの「神様の木に出会う につぼん巨樹の旅」の取材を受けました。

屋久杉の巨樹の三穂野杉をはじめ照葉樹林にあるアコウ、タブの巨樹等の写生現場や制作風景をドキュメンタリーで一週間以上、帰京後の東京のアトリエでも数回収録しました。

放映はまだ未定ですが、6、7月頃と聞いています。

巨樹がメインの番組ですが、かなり自身の研究風景が映っていると思われます。

II

参考までに、実際にどのような取材をしているか、或る日の取材行動を分かりやすく記録したレポートを次頁に添付しました。

西田俊英の11月の或る日の屋久島の森取材レポートです。

屋久島は南に位置しますが、標高は九州随一。

11月の晩秋は観光客も少なくなり、防寒対策が必要な気候となります。



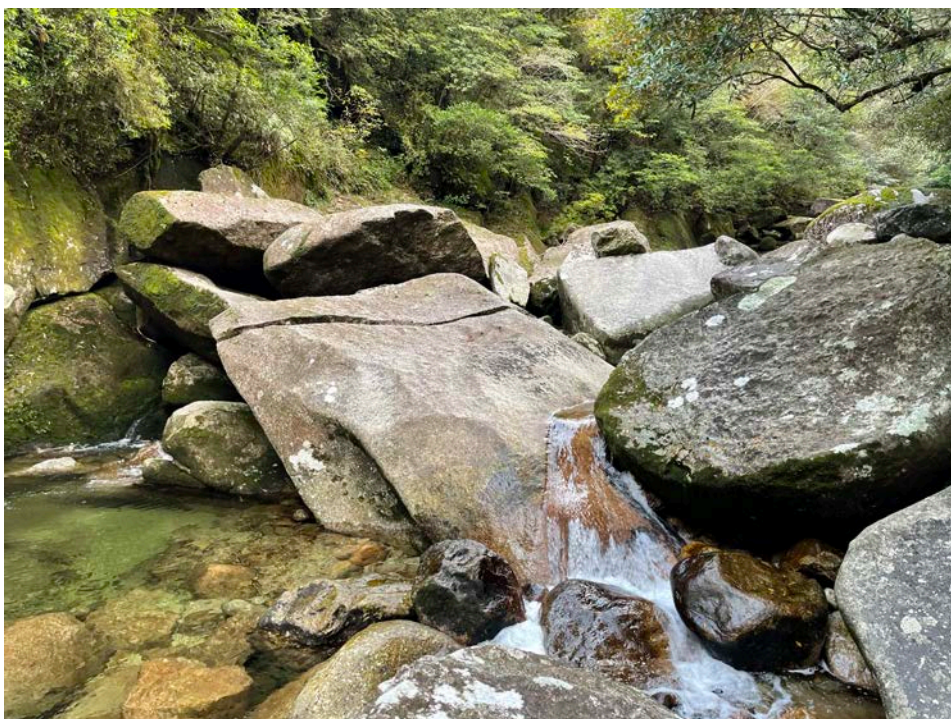
早朝、荒川登山口より岩盤をくり貫いた神秘的なトンネルを抜け、観光の登山者が行くルートから外れた人知れずの森へ向かう。

このトロッコ道はその昔、山奥の屋久杉を伐採して運ぶために作られた道ですが、今は縄文杉へ行く観光ルート

として使用され、観光シーズンは登山客に大人気。

そのトロッコ道からすぐ離れ、太忠沢から横に入り込み、時に沢に添い、渡り、山を登って行く。誰一人とも行き合わぬ静かな森。

迷ったら生死に関わる不安と緊張で、五感を総動員して道なき道を歩き始める。



人の背丈ほどあるような大きな岩がゴロゴロしている沢を途中何度も渡る。

花崗岩が海から隆起した島なので、地表の僅か数十センチをめくると全て岩のような島。



早朝の光が美しく苔を照らす。

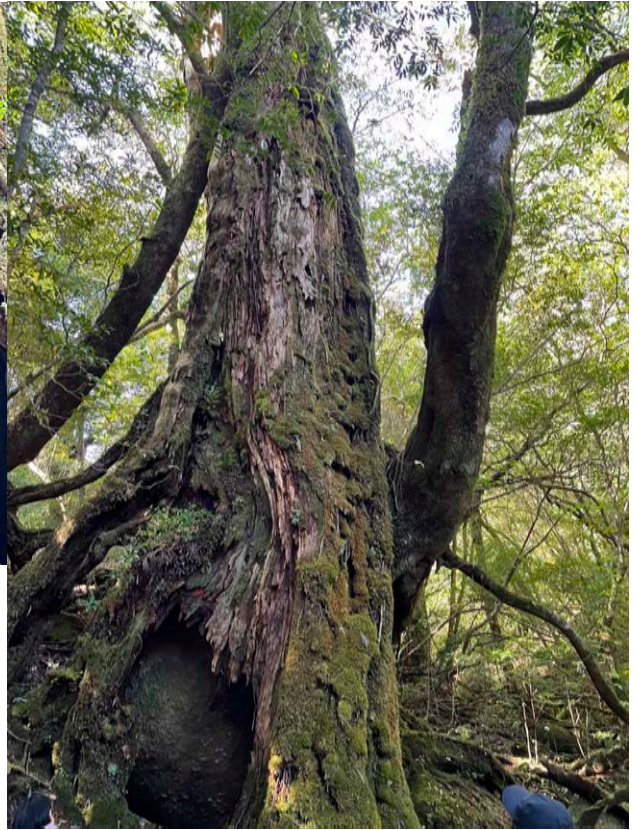
けれど苔は滑るので、見とれて転ばないように、傷つけないように、と慎重に渡る。



あたり一面苔が覆う森。
苔を荒らさない様にそっと歩く。
柔らかくてしっとりとしている感触を楽しむ。

清々しい空気が美味しい。

誰かが渡したか古き丸太橋。その昔、数人の木こりの集落がこの辺りの山にあったとも聞く。江戸時代から昭和まで、何千年生きた屋久杉がどんどん伐採されていった。



年長者の様に数多の風雪に耐え、弛まぬ努力を続けて生き抜いて来た老樹の神々しい姿と今まさに天に向かって伸びている杉。このまま何千年と生きていけるのだろうか？

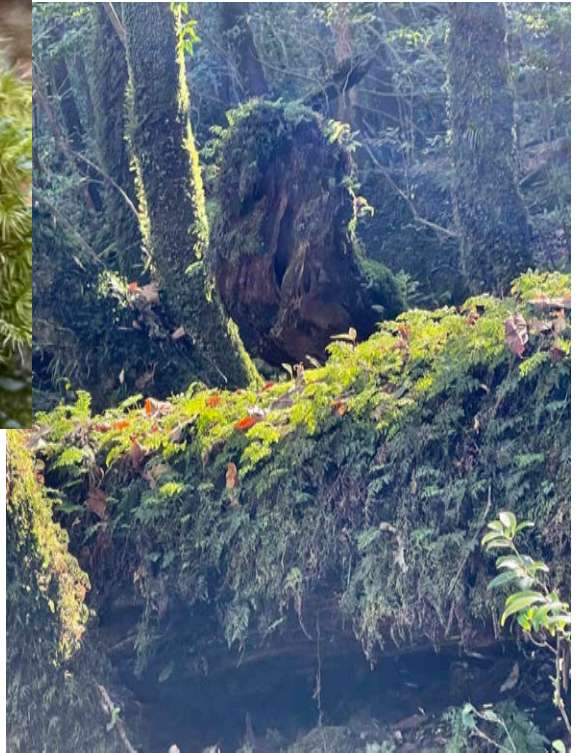


幾多の実からどれだけの実が根を張れる処に着地して、健やかに大きくなれるのだろうか？

全ては運次第だけれど、粘って、耐えてやっと芽が出たはず。そして激しい生存競争はこれからも続く。今は夢や希望に満ち溢れ、これからの成長が楽しみな若杉の初々しい姿を愛でよう。

切り倒されても、朽ち果てるまで存在意義のある枯木。
次世代の植物のために、その身を捧げている。
こうして太古の昔から再生が繰り返されていたのだろう。
人間も同じではないだろうか？
次世代の為に身を捧げなくてははいけない。

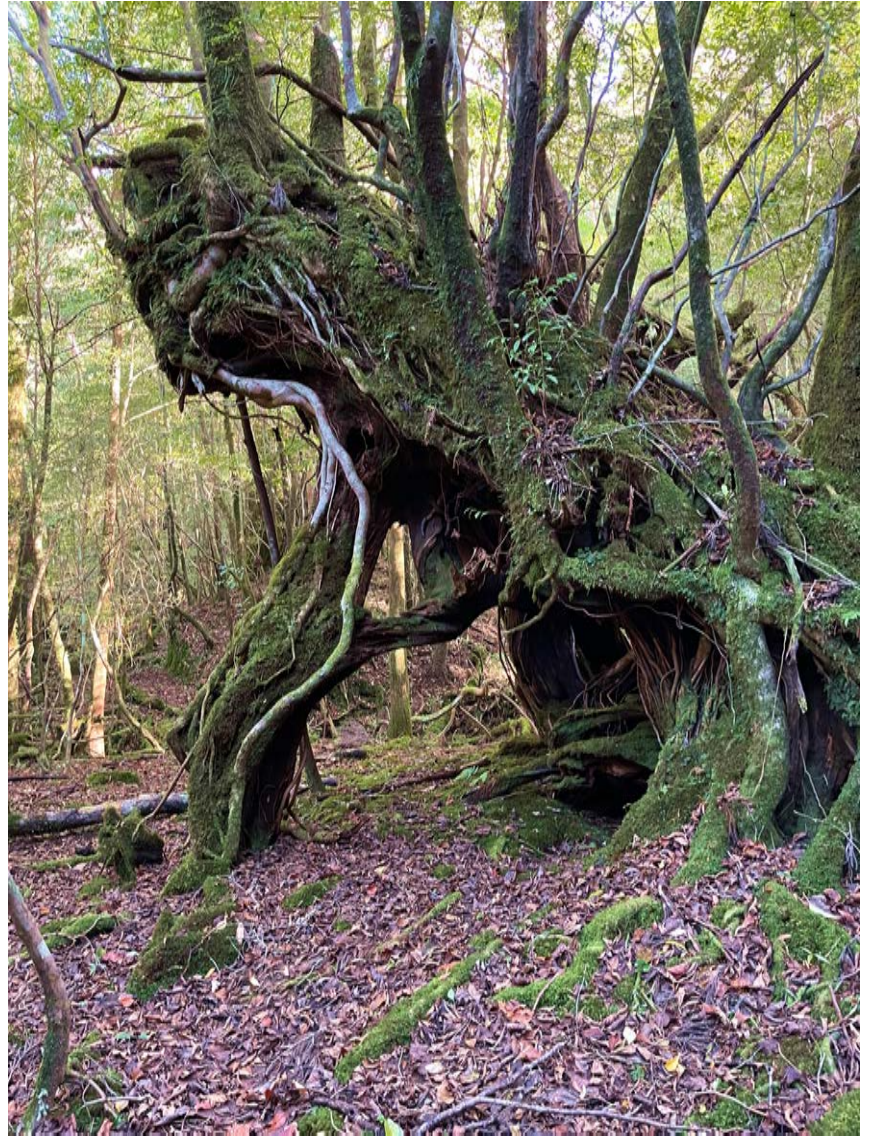




山は遅い秋。
朝の陽光に輝く倒木の苔の上にも、紅葉の落ち葉や
可愛い小さな実。
無数の種類の苔や、珍しい小さな植物がひっそりと
息づいている。



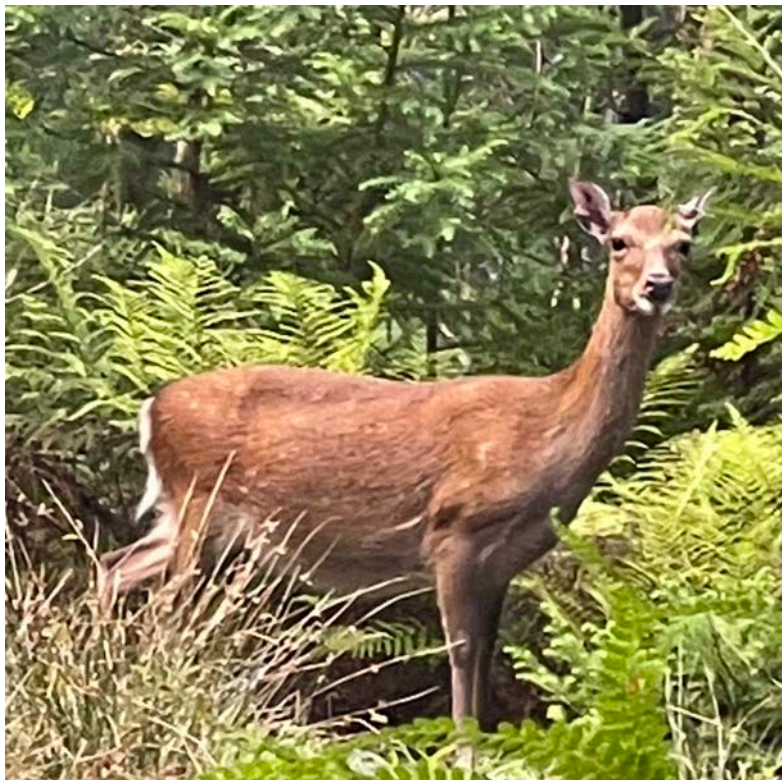
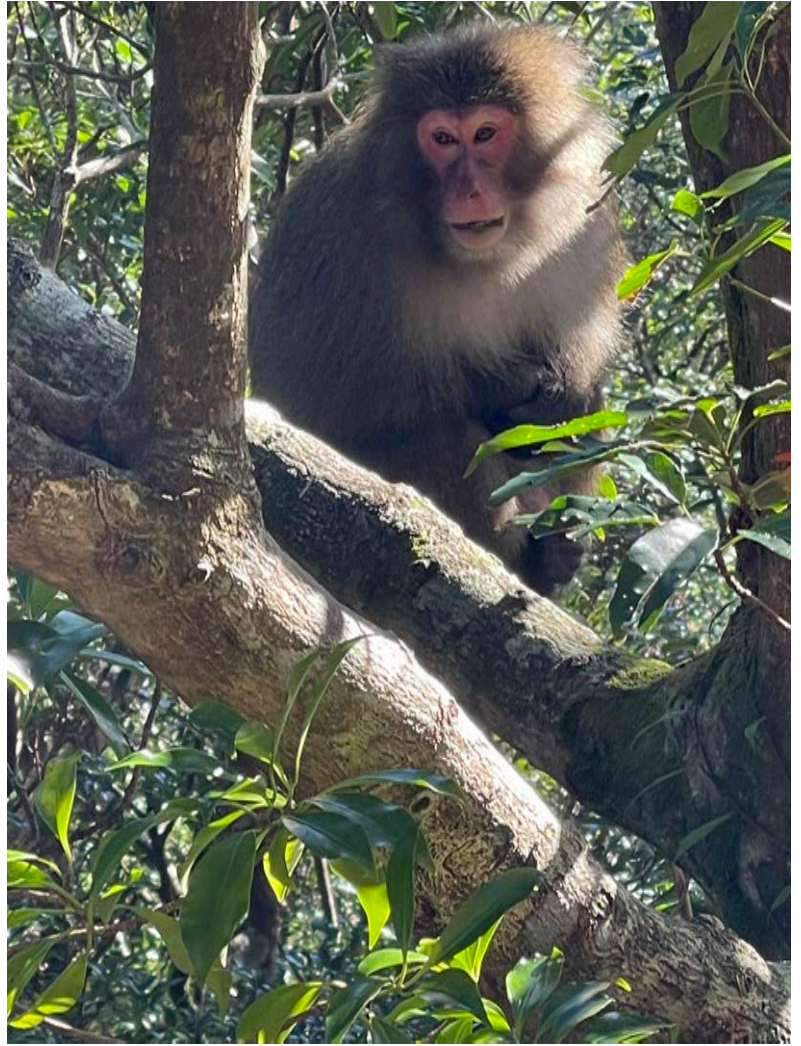
怪獣の様な不思議な樹々が
此処彼処に存在する。
着生植物達が複雑に絡み合っ
て作り上げる造形。
何かに見えると想像している
と、まるで森が怪獣の住処の
ように思えてくる。
しかし、面白がっているばかり
でなく、形を覚え、帰りの
目印にする。





誰一人とも会わないけれど、
森の住人達とは時々出会う。

何をしに森へ来たのか？と珍し
そうにこちらを眺めている。
彼らを仲間だと感じる様になっ
てきた私は、やっと森の一部にな
ってきたかな？と思う。





登山口から二時間以上かけて、やっと辿り着いた目的地でスケッチを始める。
私が太郎杉と名付けた森の主の様な大株の杉。
登山で火照った身体が、じっと座って描いているとみるみる冷えてくる。
リュックの中から防寒着を出し、昼はおにぎりを片手に一心不乱で描いていく。
風の音、樹々のざわめき、ヤクシカやヤクザル、数種の鳥たちの鳴き声や移動する気配。五感を研ぎ澄ませていると、それだけでは説明のつかない不思議な音までも聞こえてくる。何かスケッチブックを覗いている様な感覚もある。
八百万の神を感じるひと時…。

しかし、山の日暮れは早い。帰りのバスの時間に余裕を持って間に合う様に気を引き締めて筆を走らせる。しかし、到底一日では描ききれない。3、4日かけて一本の大樹を描いていく。

夢中に描いていても帰りの時間には気をつけないと野宿になってしまう。
後ろ髪を引かれながら、「今日もありがとうございました」と老樹に頭を下げ、迷わない様に慎重に道なき道を下山する。

山の日暮れは早い、海の方はまだほんのり夕暮れの美しさを感じられる。
帰りのバスに乗り、駐車場に停めておいた車に乗り換えて闇夜の中で光るといふ落ち葉を探しに行く。



この海岸近くの森で、「寒くなってしまったからまだ見えるかどうかわからないけれど」と写真家の友人から教わった光る落ち葉。

そんな不思議なものに出会うチャンスが訪れたのだから、挑戦するしかないと行ってみた。

しかし、漆黒の闇の中、いくら五感を研ぎ澄ませて10分、20分と蹲み込んでも皆目分からなかった。

後日、友人が「光る落ち葉は雨が好きだから」と土砂降りの雨の中、一緒に行ってくれた。

道路は川のように流れ、ヒキガエルがあちこちに出て

いて、うっかりすると踏んでしまいそうだ。

目指すスタジイの大木の根元に座り込んで、じっと目を凝らすこと10分。

ヘッドライトの残照も消え、漆黒の闇の中、徐々に暗闇に目が慣れてくる。

「あれかな？あっ、あれだ！見えた！」

真っ黒の地面が仄かに光り、次第にキラキラと浮かび上がって点滅している。

まるで、地表の星空。

当然、スマホでは写せないけれど、友人の写真集をぼやかしたものが現実に私が見た光景とそっくりだった。光のものは、キノコの菌糸が活動するエネルギーらしいが、生命の不思議を体感できた。



森にはまだまだ教えてもらわねばならぬことが沢山ある。

教えてもらうには知性や教養なんて必要ない、森にはほんの少し体力がいるだけ。

誰でも大丈夫。ただし、準備は周到に、そして行動は慎重に。

芸術の才能も一切いらない。

ここでは自然が師匠になって、全てを教えてくれる。造形の妙も、生命の循環も、大地の始まりに思いをはせることも…。

大学で研究期間をいただいて、この屋久島に住んで、体感したこと全てが宝物のように感じている。

そして唯一無二の美しいこの島を守らねばならないと心に深く思う。

その想いをどのように伝えるか、試行錯誤しながら屋久島の大作に挑んでいる。

